

衣の異変 ～シャツでつくる造形～

美術コース 現代アート

目的

- ・アートの素材は絵具や粘土だけではないこと、地球上のものすべてが表現の素材になることを実制作で体験する。

効果

- ・普段、身のまわりにある何気ないものを新しい観点から見つめなおすことで、主体的なものの見方に気づき、頭だけでなく手を使って知る。

到達点

- ・自身の制作構想をなんらかの形で表現し、作品完成につなぐ。



事前学習

講師の作品数点の写真のコピーを配布する。

ワークショップの流れ（2日間く2コマ/日）

現代アートについての講義とビデオ鑑賞



シャツを使った作品制作例を実演によって解説



各自が持参したシャツについての思いやコメントを、文章作成



展示する場所も自由に想定し、制作構想プラン作成



作品制作中、個別にアドバイス



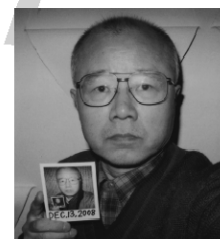
完成作品を順次展示



全員で校内の各展示場所を順に巡り、作品のプレゼンテーションをし、合評と写真撮影

事後学習

作品を撮影した写真を校内で展示する。



講師
今井
祝雄
のりお

略歴

造形作家

大阪市立工芸高等学校在学中から、具体美術のリーダー吉原治良氏に師事、もと具体美術協会会員。パリ、シドニーのビエンナーレなど内外の美術展に出品。第10回シェル美術賞1等賞、大阪市都市環境アメニティ表彰。美術館やギャラリーという枠組みのない日常の空間で展開する造形表現や芸術と社会に関する著書もある。



●現代アート、具体美術協会等について事前に調べておくと、発想が広げやすい。

●展示は、美術教室だけでなく、中庭や廊下など、敷地内のあらゆる場所を想定すると、制作意欲と作品の完成度の向上につながる。

…ワークショップを実施して…

講師の感想

各自異なる身近なシャツを素材に課題を出すことで、全員が熱心に、楽しんで参加できた。現代アートへの興味の糸口を引き出すことができ、思いもよらない発見や、美術を再認識した生徒がいたようだ。講義・実習に加え、展示にも時間がかかるが、その後のディスカッションにも時間をかけてより理解を深めることが重要だ。

先生の感想

身のまわりの素材を使ったので、現代美術に対する親近感が生まれたのではないと思う。美術に対する「概念ぐだき」ができたように感じる。積極的にチャレンジしようという生徒の気持ちが変わってきた。普段なら出来ない場所での展示が出来たことも、特別授業ならではのことで痛快だった。

生徒の感想

- ・「この世にある全てのものが材料になる」って聞いて、美術って奥が深いな—と思った。
- ・展示の仕方ひとつで印象が変わること、題名でも絵の意味や印象が変わることを知った。
- ・作品の表現方法は、知識や経験によって大きく差が出てきそうだな、と感じた。
- ・絵や文字で表現できるという人間の特権を、もっと活用しなければもったいないと思った。

より発展的な ワークショップを 実施するために

- シャツ以外の日常的な材料を使って作品をつくる。
- 展示の場所だけではなく、動き、人間関係、時間軸など色々な要素を含めた発想を試み、制作の幅を広げてみる。